りびんぐらいぶず　平成31（2019）年1月第2号

浄土真宗の救いのよろこび

◆浄土真宗の救いのよろこび

一、阿弥陀如来の本願は　　かならず救うまかせよと
**　　南無阿弥陀仏のみ名となり　　たえず私によびかけます**
二、このよび声を聞きひらき　　如来の救いにまかすとき
**　　永遠に消えない灯火が　　私の心にともります**
三、如来の大悲に生かされて　　御恩報謝のよろこびに
**　　南無阿弥陀仏を称えつつ　　真実のみちを歩みます。**
四、この世の縁の尽きるとき、　　如来の浄土に生れては
**　　さとりの智慧をいただいて　　あらゆるいのちを救います**
五、宗祖親鸞聖人が　　如来の真実を示された
**　　浄土真宗のみ教えを　　共によろこび広めます**

（Ref）『拝読　浄土真宗のみ教え』編集委員会編　本願寺出版社　2010年10月15日第七刷発行

◆はじめに……経緯……

これは、曾て平成十二年十二月第一号で取りあげた「浄土真宗の救いのよろこび」の改めての見直し版であることをお断り申します。それは折角の一文の「たえず私によびかけます」の態様を、どうすれば鮮明に解説できるかを温めてきたことに基づきます。

「**浄土真宗の救いのよろこび**」は、『**領解文**（りょうげもん）』のよき伝統とその精神を受け継いで、浄土真宗の救い、信心のよろこびを自ら口に述べる文章であります。

時代の変化と共に、言葉も変り、蓮如上人の御言葉も現代人には届き難くなりました。

そこで、去る二〇〇五（平成十七）年、教学伝道研究所の手により親鸞聖人があきらかにされた浄土真宗のみ教えを現代の人々に親しみ易く表現した一文が制定されました。

全部で五聯よりなりますが、ここでの解説は最初の二聯に留めおきます。

ご承知のように、本願寺第三代覚如上人から第八代蓮如上人に引き継がれて今日に伝えられた**信心正因　称名報恩**のご常教では、信心が先で念仏が後だとされ、どうしたことか親鸞聖人がお示し下さった六字釈の**本願招喚の勅命**がどこかに置きざりにされてきたかのようでありました。

実は、「**本願招喚の勅命**」こそは、浄土真宗の救いのエンジンに当る大切のおみのりです。

それ故、如来様のお喚び声に遇わせて戴くプロセスの大切さを喚起してご案内下さることはまこと有り難いことでありました。

救いのよろこびは、諸仏如来に称えられたお名号を聞信する「聞其名号（もんごみょうごう）」

のお心を本願招喚の勅命の側面から説き明かされた優れた成果だと頂戴できます。

◆勅命の他に領解（りょうげ）なし

浄土真宗の救いは、「本願の名号の聞信」にあります。それゆえ、その原体験ができるかどうかがお同行にとって浄土真宗の救いに与りうるか否かの分かれ目になるのです。

第一聯のお心を窺うには、暫く「お名号を聞く」お謂れに立ち入る必要がございます。

一、阿弥陀如来の本願は　　かならず救うまかせよと
南無阿弥陀仏のみ名となり　　たえず私によびかけます

阿弥陀如来は、自らが南無阿弥陀仏の名号に姿を変えて、その名号を凡夫に聞かしめずにはおかないとのご本願をお建て遊ばしたのでした（Ref 第十七願、第十八願）。

衆生はそのことに気がつきませんのでまずお釈迦如来がお名号の功徳のすばらしさを縷々讃嘆して下さるのでした。

お名号とは何か、**帰命尽十方無礙光如来（十字）、南無不可思議光仏（八字）、南無阿弥陀佛（六字）のお名号を親鸞**聖人は併せ用いられましたが、**六字のお名号**が一般的です。

「南無阿弥陀仏」の「南無」の意訳は、「帰命」です。「帰命」の二文字こそは、浄土真宗のみ教えの要、**本願力回向**と**本願招喚の勅命**の根拠となる御文なのです。

「勅命」とは「帰せよ（私の願いを聞き届けておくれ）との如来様のご命令」です。

親鸞聖人は、招喚の「喚」に**「ヨバフ」**とご左訓遊ばしました。これは、如来様が絶えず喚び続けて居て下さるありさまを顕します。

お謂われを聞いたからには、いよいよお釈迦様（念仏者）のお姿に習い、「さあ、称えてごらん」と本願力回向してお与え下さったお名号を自らもお称えするのです。

称名は如来様がお手許で仕上げられた如来様の行（大行）ですから、称えれば大行が働き出して下さり、直ちに聞こえて下さる如来様のお喚び声が胸底に届いて下さるのです。

私は届いて下さったそのお喚び声に喚び覚まされて如来様の真のお心を頂戴するのです。

以上が、第一聯の大意であります。

第一聯は、お名号のお謂れを如来様のお心の側から説き明かされたお釈ですから、古来、**「法体釈（ほったいしゃく）」**と称されてきました。

続いて、第二聯に参ります

二、このよび声を聞きひらき　　如来の救いにまかすとき
永遠に消えない灯火が　　私の心にともります

第二聯は、如来様の勅命を衆生（私）が聞き開く有様を謳われたものであります。

「聞きひらく」というのは、それまで衆生が閉ざして来た心の扉（如来様のご本願のお喚び声をはねつけてしまっている衆生の心の蓋）を開くことを申します。

「聞きひらき」「如来の救いにまかす」というのは、それまではねつけて居た疑いの扉が解

き放たれたありさまを指します。

この心の扉を開くことが浄土真宗の**信心**を頂戴することを指しています。

かくして、如来様のお喚び声によび覚まされたそのとき、衆生（私）は、苦悩の今生の真っ只中に浄土へと続く白道の出発点に立つことになるのです。

善導大師が『観経疏』で明らかにされた**二河白道**（にがびゃくどう）の東岸です。

そのときから、白道上の旅人（私）は、お釈迦如来の「往（ゆ）け」とのお言葉に支えられ、阿弥陀如来の「来たれ」との招喚のお言葉に喚び覚まされつつ、温かさに包まれた人生を歩むことになります。

「帰命」というのは、二尊の勅命にしたがって、「まことにかたじけのうございます」と召しに叶う言葉ですから、衆生から見れば、如来様の仰せに従うことになるのです。

同じお名号のお謂れを、今度は受け止める衆生（これを機といい、私を指します）の側から明らかにして下さったものですから、これを古来**「約機釈（やっきしゃく）」**と称してきたのでした（Ref『尊号真像銘文』註釈版初版 P170）。

長い間、如来様の本願のお心からのお喚び声をはねつけて来た疑いの蓋は、終に解き放たれたのですから、お喚び声が私の胸にしっかりとお宿り下さり、永遠に消えない灯となってその道行を照らし続けて下さることになるのでありました。合掌

（後書き）「浄土真宗の救いのよろこび」は、朝夕ご尊前で『お正信偈』と共に、或いは百歩譲ってせめてこの御文だけでも頂戴して戴きたいご文であります。合掌。

◆修正会（元旦会）　元旦(火)　午前七時、
◆仏教婦人会新年会　一月十六日(水)十三時、
◆仏教壮年会総会一月二十日(日)十八時半（構想段階）、
◆正覚寺役員会一月二十日（日）十九時半、
◆正覚寺初講　一月二十七日（日）午前十時

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥